

文化 第八十二卷 第三・四号 一秋・冬一 別刷
平成三十一年三月二十九日発行

佐藤伸宏教授の業績と学風

佐倉由泰



佐藤伸宏教授の業績と学風

佐 倉 由 泰

本年二〇一九年の三月に、佐藤伸宏先生が、定年により、東北大学大学院文学研究科国文学専攻分野教授の任を退かれる。先生は、東北大学文学部、東北大学大学院文学研究科で学ばれた後、一九八一年四月以降、三十八年間の長きにわたり、ノートルダム清心

女子大学、宮城学院女子大学、東北大学教養部、東北大学文学部附属日本文化研究施設、東北大学文学部・文学研究科で、研究、教育に当たってこられた。仙台に戻られて三十五年、東北大学の教員になられて三十年、東北大学文学部・文学研究科国文学研究室の専任教員として二十三年の時を重ねられた。その間、大学運営や、学外の学術、文化の維持、発展にも深く寄与してこられた。

先生の御専門は、日本近代文学である。中でも、日本近代詩の研究において、かけがえのない多大な成果

を積み重ねてこられた。「日本近代詩とは何か」という根源的な問いのもとに、幅広い独自の観点から、日本近代詩の成立、展開、帰趨の様相とその意味を明らかにする重要な業績を挙げておられる。

日本近代詩の展開に重要な画期をもたらしたものに、フランス詩壇のサンボリズム（象徴主義）、象徴詩がある。その担い手が、シャルル・ボードレール、ステファヌ・マラルメ、ポール・ヴェルレーヌ、アルチュール・ランボオらであり、日本における彼らの詩の受容において決定的な役割を果たしたのが、上田敏である。佐藤先生は、一九〇五年（明治三十八年）刊行の訳詩集『海潮音』を中心に上田敏の象徴詩の翻訳に注目している。『海潮音』の訳詩は、内容、表現において原詩との隔たりが大きいと評されるが、先生は、一八八二年（明治十五年）刊行の『新体詩抄』の所

取詩をはじめ、日本の翻訳詩の歴史的展開を捉えた上で、上田敏の翻訳が、原詩に照応した、日本の詩としての声調を備えることをめざすという確かな見識と周到な配慮にもとづく個性的な営為であったことを明らかにしている。このような指摘は、上田敏の訳詩を精緻に分析し解釈することはもとより、上田敏の訳詩と原詩とを照合して、その翻訳における配慮や工夫を的確に検証しては提示し得ない。フランス詩壇の象徴詩の原文に対する確かな読解、鑑賞があつてはじめて可能な成果である。先生は、フランス語で書かれた詩、詩論、研究書をはじめ、海外の文献の読解にもたいへん旺盛に取り組んでこられた。アドリアン・マリノ (Adrian Marino) による比較文学の研究書、*Fiambre ou le comparatisme militant* の翻訳、『戦う比較文学』(勁草書房、一九八八年一〇月) を、渡邊洋氏との共訳で刊行されてもいる。

こうしたたいへん豊富な翻訳の経験もふまえて、先生は、翻訳とはいかなる営みであるのかという根源的な問題を切実に意識し、そこに豊かな可能性を見出すとともに、本質的で不可避的な困難さや不可能性をまっすぐに見据えている。こうした本質的な困難さや不可能性の理解を前提にすることで、原詩の声調を日本語の声調に生かそうとした上田敏の翻訳の苦難と

意義が鮮明に浮かび上がってくる。先生の研究の本領は、思考上の安易な楽観を徹底して排し、考究の目的と方法を的確に見定め、周到に思考を進めるところにある。その中で、丹念な読解と鑑賞により、詩作や翻訳の機微や滋味をのびやかに感得し、詩作や翻訳の抱え込む困難と不可能性、それを乗り越えようとした詩人たち、翻訳者たちのみごとな苦心と工夫を明らかにしている。『海潮音』の文学史、翻訳史における意義もそのような読解と考究によって捉えている。上田敏が象徴詩というものをどのように理解し定義したのかということの解明についても同様である。敏が『海潮音』刊行の翌年に発表した詩論「象徴詩積義」で、マラルメの象徴詩の理解にもとづいて、象徴詩の再定義を行っていることを精細に考証し、その苦心の意義と限界を提示している。

先生は、上田敏の象徴詩理解の転回を明らかにする前提として、フランスでは、自然主義に対する批判、否定にもとづき、それへの反措定として成立した象徴主義が、日本では自然主義と同時に成立し、自然主義の圧倒的な隆盛の中でその批判を浴びたという捻れを巨視的に明快に展望している。日常的な現実のみを実在と見做す立場を退け、その背後や彼方に不可見の現実があることを確信し、これを形象化することを本来

主張したはずの象徴主義が、日本では、現実への直面を回避するものとして批判され、否定されたという状況を、先生は重要な問題として直視している。こうした状況の渦中に、上田敏の訳詩、さらには、日本の象徴主義、象徴詩の抱えた多大な苦難と、それを乗り越えようとした営為の貴重な意義があった。

このような日本の象徴詩をめぐる大きな展望の中で、上田敏と並んで注目されているのが蒲原有明である。とりわけ、一九〇八年（明治四十一年）に刊行された、有明の文語定型詩から成る第四詩集『有明集』を、日本の象徴詩の歴史的展開の中で最重要視し、その詩作の特質、位相、意義、および限界を精緻に論じておられる。先生は、『有明集』の詩作の詳細な分析、考察を通して、刊行直後から現実世界に接していないという批判に曝されたこの詩集を、象徴詩の創出における比類のない達成と捉え直す観点を明確に提示している。有明が、象徴詩の理念を、内面の世界を自立的に形象化するものと認識し、その理念を詩作のうちに実現していることを跡付ける論証は、きわめて説得的である。そこに浮かび上がるのは、有明の象徴詩の確立の画期的な重要性である。その銘記すべき確立は、『海潮音』の受容、マラルメを中心とするフランス象徴主義の確かな理解、仏教思想への親炙と、北村透

谷のイデアリズムの継承において達成されたものと捉えている。

佐藤先生は、上田敏から蒲原有明へという展開を基軸にして、日本近代象徴詩の進展をのびやかに捉えている。その展望は、日本近代詩はもとより、日本近代文学の歴史的展開についても、大きな見直しを迫る。

このような示唆に溢れた論述の結晶が、著書『日本近代象徴詩の研究』（翰林書房、二〇〇五年一〇月）である。本書に対しては、二〇〇六年四月に、日本詩人クラブから「日本詩人クラブ詩界賞」が授与されている。そして、本書の「後書き」の中には、詩の読解、考究に対する先生の深遠な意思がうかがわれる、次のような記述がある。

私にとって、詩を読む喜びを最も深く豊かにもたらしてくれたのが象徴詩であった。初めて学んだフランス語をとおして、辞書を片手に、おぼつかないながらフランス象徴詩の世界に分け入ろうとした学生時代の満ち足りた時間は未だ忘れがたい。詩の言葉の一つ一つが備えるニュアンスやコノテーションを掘り下げ、音楽的効果を測定しながら、その喚起力や暗示性を手探りしつつ言葉の動きそのものを辿りゆく中で、詩は少しずつその豊かな世界を開示してくれる―そうした詩の生成

の現場に僅かでも触れることは何ものにも換えがたい喜びであった。象徴詩を読む中で私はそのような愉悅を味わい続けていたと言つてよい。そして日本の近代詩に目を向けた時、蒲原有明の詩集『有明集』に、象徴詩としてのこの上なく豊かな言語的世界を見出すことになったのである。ここに収めた論考の中心をなすのは、そのような象徴詩をめぐる私自身の体験を背景として、その愉悅の内質を解き明かすべく、言葉が生動的に作用する現場を注視しつつ、詩的世界が生成する機構を可能な限り言語化しようとした試みである。

ここにはとても幸福でかけがえのない読解と考究の経験が記されている。文学作品を読むこと、考えることの貴重な原点が提示されている。そして、こうした経験の蓄積に支えられた先生の詩の読解と考究は、「詩とは何か」という根源的な問題にも向かつて行った。『有明集』を編んだ後の蒲原有明の詩作が文語定型詩から口語自由詩へと移ったように、自然主義の文芸思潮にも促されて、日本の近代詩の主流は、文語定型詩を離れて、文語自由詩、口語自由詩、散文詩へと転回した。それは旧来の制約を脱して新たな自由をめざす試みではあったが、文語、定型という制約を離れることは、日本近代詩が自らを詩たらしめてきた根拠を

失うことを意味した。口語自由詩とは、散文、小説とは異なる新たな詩の原理を模索するという困難に満ちた営みであった。佐藤先生は、明治末から大正期における詩人たちが抱えたこの重大な困難、アポリアに着目して、『有明集』の後の日本の近代詩の展開を解き明かそうとされた。

その考究の大きな集成が、著書『詩の在りか―口語自由詩をめぐる問い』（笠間書院、二〇一一年三月）である。「詩の在りか」を探り出すことを宿命づけられた「口語自由詩」というアポリアを前にして、日本の詩人が自らの〈詩〉の根拠をどこに見出したのかという問題設定のもと、高村光太郎、室生犀星、萩原朔太郎、三富朽葉に焦点を当て、この四人の詩人のそれぞれ独自の詩作の理念、実態とその意義を明らかにしている。本書は、光太郎、犀星、朔太郎、朽葉の各人による個性的、独創的な〈詩〉の在りかの模索を丹念に論じた各論において創見と示唆に溢れている上に、その総体が、明治末から大正期を中心とした日本近代詩の展開の新たな全体像を明瞭に浮かび上がらせており、前著『日本近代象徴詩の研究』と並んで、日本近代詩研究における画期的な著述となっている。

佐藤先生の業績は、この二つの著書をはじめとする多くの論述となって世に示され、上田敏の翻訳、島

崎藤村、蒲原有明、高村光太郎、萩原朔太郎、北原白秋、三木露風、室生犀星、三富朽葉、中原中也の詩作の意義などを次々と明らかにしてきた。しかも、先生の鋭敏で確かな詩の読解、解釈は、この日本の詩人たちのの作にとどまらず、彼らが進んで受容した、フランス詩壇の人々、シャルル・ボードレール、ステファヌ・マラルメ、ポール・ヴェルレーヌ、アルチュール・ランボオ、エミール・ヴェルハールレンらの詩作、詩論の原文にも及んでいる。先述のとおり、比較文学の研究書の翻訳の御業績もある。

しかし、それでも、先生の読解、考究の成果のうちで世に現れているものは未だごく一部にとどまっている。詩に限らず、小説、戯曲、短歌、俳句、評論の読解、解釈においても、論述に至っていない貴重な発見を次々と積み重ねておられる。それほどに、先生の文学研究者としての力量、知見は測り知れない。先生が蔵しておられるような深い識見こそ、「叡智」と称するにふさわしいと、私は思う。これからも、豊かな思考に支えられた滋味深い読解、考究を示し続けていただきたいと切に願う。

それは、先生の教えを受けた多くの卒業生、修了生の願いでもある。先生の底知れぬ力量、識見は、多年にわたる教育において、着実に生かされてきた。

先生には、「文学とは何か」という深く切なる問いがある。その問いに根ざして、授業や学生との面談の場で発せられるアドバイスには、驚くほどの的確さと説得力がある。こうした先生の透徹した思考に学んでのち、社会で旺盛に活躍している卒業生、修了生は、学界に限らず、実に多い。先生の「文学とは何か」という根源的な問いは、卒業生、修了生が個人として、社会人として、教育者、研究者として活動する上でのかけがえのない思考を喚起し続けている。先生の研究者としての深遠な洞察力は教育の場で尊い成果をもたらしてきた。それだけに、これからも先生の読解と思索に触れたいという願いは強い。

今、世の中では、目に見えるわかりやすさを求める傾向が強まっている。教育、研究の場でも、共通の指標を設け、達成度を数値化することが推し進められようとしている。先生が、長い時間の中で叡智を注いで捉えてこられた、慎ましく深遠なものの尊さも看過されようとしている。しかし、そうした風潮の中にあるからこそ、先生がたいせつにされた、立ち止まって静かに考えることを、私たちはくり返して行きたい。

佐藤伸宏先生、ありがとうございます。これからもお元気に御活躍くださいますよう、祈り願っております。